

奥備中・美作と伯耆の国境近く 和鉄の道の十字路の山上で700年

5.

「和鉄の道」を見下ろしてきた一本桜「醍醐桜」を訪ねる

岡山県真庭市別所 (旧落合町大字吉念寺) 2008. 4. 13.

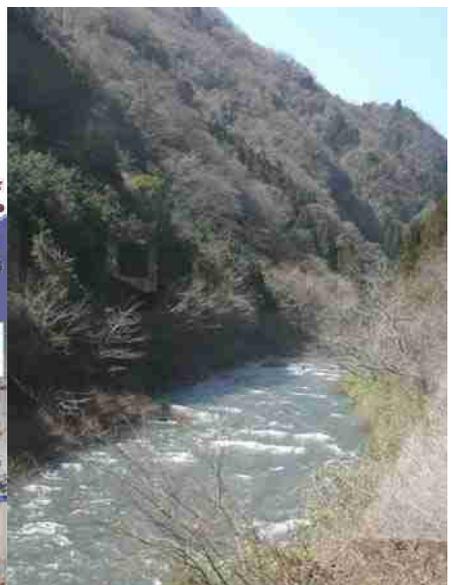
醍醐桜
 1987年、JPNCAの調査で、
 「醍醐桜」は、美作国備前郡
 1000年、備前郡落合町大字吉念寺
 境内にあり、樹齢700年と推定
 されている。樹高18メートル、
 樹冠幅15メートル、幹の太さ
 100センチメートル、樹皮は
 灰褐色で、縦長の皮目がある。
 花は淡紅色で、5～6月頃に
 咲く。樹皮は、古くから薬
 材として利用されている。
 真庭市



集落を見下ろす丘の上で満開の花を空に向かって咲かせる一本桜「醍醐桜」 2008. 4. 13.

中国山地の山深く 古代からの大製鉄地帯 伯耆・美作・奥備中の国境近く
 国境を越えて たたらの里を結ぶ大動脈「和鉄の道」

中国山地を南北に越える出雲街道と東西に山中を結ぶ東城街道の十字路で
 見上げる丘の上に 空に向かって、満開の花を咲かせる一本桜「醍醐桜」がある
 また、この製鉄地帯の山中 山を切り崩した砂鉄採取跡は格好の牧場地
 神戸・近江・松坂牛のルーツ たたらの人々が育てたブランド肉牛「千屋牛」がある
 これらも 古くから「和鉄の道・Iron Road」を眺めてきたモニュメントである



中国山地の東部 備中・伯耆周辺のたたら製鉄地帯をむすぶ街道・川とその集散地

中国山地のたたら製鉄地帯 伯耆・美作・備中の三つの国が境を接する奥備中・美作の山懐に東から津山・勝山・新見と古くから中国山地の物産の中継地として栄えた街道筋の町がある。その物産の中心が「鉄」でこれらの町を經由して「和鉄の道」が四方へ続いていた。

日本海側の出雲から伯耆大山山麓・中国山地を越えて、中国山地の勝山・津山を経て、播磨から大和を結ぶ古代からの大製鉄地帯を結ぶ和鉄の道「出雲街道」。古代には出雲から大和へ鉄を運ぶ「鉄の道」として発達し、中世には「元弘の変」で京から隠岐島へ流された後醍醐天皇がたどった道として知られ、江戸時代以降は鉄や木綿など数々の物産品の輸送とともに参勤交代の主要交通路となった。

また、中国山地の山中を西から東へ 西の新見・東城を経て 備後・石見・安芸とつながる中国山地のたたら製鉄地帯を縫って東西に結ぶ鉄の道「東城街道」が通り、その東の終着点が勝山であった。

また、新見・勝山・津山はたたら製鉄地帯の中国山地を南へ備中・備前を南北に流れ下る3つの大河 高梁川・旭川・吉井川の上流部の川筋に接して位置し、中国山地や日本海側から瀬戸内海への高瀬舟を使った海運の中継地でもあった。特に出雲街道と東城街道が交わり、旭川の高瀬舟が開かれていた「勝山」は勝山藩の城下町であるとともに古くから数々の物産の中継・集散地・街道の要衝地として西の新見 東の津山や南の備中高梁などと共に栄えたところである。

そんな「鉄の道」が通る伯耆・奥備中・美作の国境地帯 勝山と新見に程近い真庭市旧落合町の街道筋の小さな山の頂に空に向かって咲き続ける樹齢 1000 年とも 700 年とも言われる巨樹の一本桜「醍醐桜」があるというのを「奥備中」のたたらを調べていて知りました。 しかも、この桜のある真庭市別所(旧落合町大字吉念寺)の「別所」の地名はかつて古代数々の技術集団が移り住んで新たに集落を開いた地に名図けられた地に多く「鉄関連地名」のひとつ。

この里でも たたら製鉄が営まれていた痕跡があるかもしれない。

また、この地の北西の製鉄地帯の山中「千屋」には山を切り崩し砂鉄採取跡が、広い草原となってひろがり、たたら製鉄を行っていた人たちが、使役に使っていた牛を放牧・改良して 現在の神戸・近江・松坂牛のルーツといわれる「千屋牛」の生産地。 たたらの人たちがが育てたブランド肉牛 黒毛和牛「千屋牛」があり、今もこの砂鉄採取跡が草原として広がり、草原の中に点々と鉄穴流し跡の痕跡が残っているという。

この3月 新見の「大成山たたら跡」を訪ねた時には、残念ながらどちらも訪ねられず。

特に、4月「醍醐桜」が満開の花を咲かしていると聞いて うずうず。

和鉄の道の街道で 空に向かってそびえ立つ一本桜の姿、また、鉄穴流し跡の広がる牧場のイメージを千屋牛の郷に重ねて 4月13日再度 奥備中を訪ねました。



奥備中・美作を中心とした中国山地 近世の交通路



奥備中の多々良の人たちがそだてた「千屋牛」

【 内 容 】

1. 概説 近世の奥備中を通る街道と「醍醐桜」・「千屋牛」
2. 醍 醐 桜 真庭市別所(旧落合町大字吉念寺)を訪ねる 2008. 4. 13.
3. 奥備中 高梁川本流の最上部 新見市千屋に たたらの痕跡を訪ねる 2008. 4. 13.
山砂鉄採取の跡が育てた肉和牛「千屋牛」
4. まとめ

1. 概説 近世の奥備中を通る街道と「醍醐桜」・「千屋牛」

■ 中国山地の鉄の集積地 新見・勝山・津山

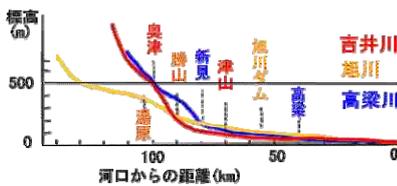
出雲街道・東城街道と瀬戸内へ流れ下る3大川(高梁川・旭川・吉井川)

岡山には東から吉井川、旭川、高梁川という3つの大きな川がある。

吉井川、旭川、高梁川は河口からそれぞれ中国山地のふもとに位置する津山市、勝山町、新見市まで比較的ゆるやかですが、それから上流は急な流れとなっている。

自動車や鉄道がなかった昔は川を舟で行き来し、吉井川、旭川、高梁川の下流部にはそれぞれ西大寺(現在の岡山市西大寺)、岡山の城下町、倉敷という町があり、川と海の交通の中心でした。

また、津山、勝山、新見や成羽まで川舟が上り、上流からは砂鉄、木材、米がくだり、下流から上流には塩などが運ばれた。



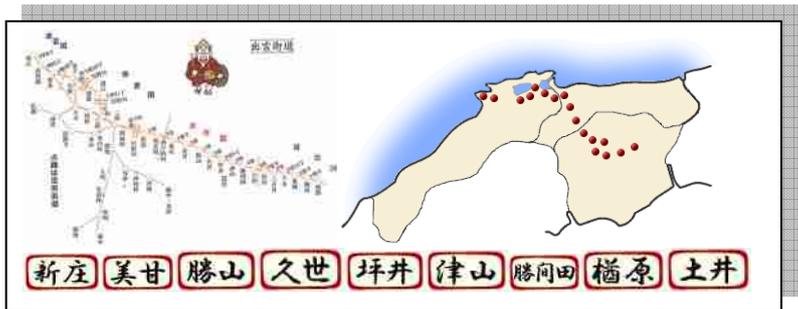
	高梁川	旭川	吉井川
流域面積 (水の流れ込んでくる広さ)	2,670km ² 全国で23位	1,800km ² 全国で37位	2,060km ² 全国で29位
幹川流路延長 (本流の長さ)	111km 全国で44位	142km 全国で23位	133km 全国で30位
源流 (本流の始まり)	花見山(新見市)	あさなべわしがせん 朝鍋鷲ヶ山(川上村)	かみさいりばらん 三国山(上齋原村)
主な支川 (本流に入ってくる主な川)	小田川、成羽川	砂川、宇甘川、 備中川、新庄川	金剛川、吉野川、 加茂川

旧出雲街道

日本海側の出雲から伯耆大山山麓から中国山地を抜け中国山地の勝山から美作から大和を結ぶ道は古代からの大製鉄地帯を結ぶ道。

古代には出雲から大和へ鉄を運ぶ「鉄の道」として発達し、中世には「元弘の変」で京から隠岐島へ流された後醍醐天皇がたどった道として知られている。

江戸時代以降は鉄や木綿の輸送とともに参勤交代の主要交通路となり、勝山藩の城下町であった勝山は、街道の要衝の地、高瀬舟による物資の集散地として栄えた。



東城街道

備後国 東城(現在: 広島県庄原市東城町)より各地に至る街道、または当地を經由し、日本海から瀬戸内海に至る山陰と山陽を連絡するための街道の総称で、日本有数のたたら製鉄地帯 中国山地の鉄を各地に運ぶ「和鉄の道」でもある。

中国山地の山中を西から東へ 東城から西の新見を経て東の終着点が勝山へと中国山地のたたら製鉄地帯を縫って東西に結ぶ道もその一つで、これらの道を通して、中国山地の鉄が日本各地に運ばれた。

東城-新見・美作国勝山を結ぶ道のほか、東城-出雲国 東城-七日市宿(旧山陽道、現・岡山県井原市)・笠岡港 東城-備後福山城下 東城-吹屋・備中松山城下 東城-上下・尾道・三原 東城-庄原・三次 などのみちが「東城街道」とよばれる

■ 醍醐桜 真庭市別所(旧落合町大字吉念寺)

この桜は、ヒガンザクラの一種「アズマヒガン」で、推定樹齢は一〇〇〇年樹元の周囲九メートル枝の広がり四方に十メートル伸び高さは十八メートルある。「醍醐桜」の名前の由来は、鎌倉末期の元弘の乱により後醍醐天皇が隠岐に流される途中ここに立ち寄り、美しさを賞せられたとの言い伝えによる。規模・樹齢ともに県下一であり、昭和四十七年十一月九日、岡山県の天然記念物に指定されている。

真庭市



中国道 北房 IC と北房 IC のほぼ中間点「栗原」から北側の月田・勝山へ山越えする道に入り、ほぼ中間点 左手の別所集落の谷筋を上り詰めた丘の上に立つ一本桜。ヒガンザクラの一種「アズマヒガン」で、鮮やかな濃いピンク色の花をつける。

推定樹齢は1000年といわれ、目通り7.1m、根本周囲9.2m、枝張り東西南北20m、樹高18mの県下一の巨木。日本名木百選にも選ばれた見事な桜で、伝説によれば、鎌倉末期 元弘2年(1,332年)元弘の乱で、後醍醐天皇が隠岐に流される途中ここに立ち寄り、美しさを賞されたとの言い伝えがあり、この名がついた。



「醍醐桜」 2008. 4. 13.

■ 千屋牛 新見市千屋

たたら製鉄に携わる人たちが育てた肉牛の黒毛和牛ブランド牛

千屋牛の歴史は、江戸時代、太田辰五郎が一代をかけて築きあげた千屋の牛市に始まる。

江戸時代、伯耆との国境をなす中国山地の峰々がそびえる千屋周辺では砂鉄が取れ、砂鉄を撮る場所・鉄穴場がたくさんあり、鉄穴流しの作業に、馬を使う代わりに牛を使い始めた。

この地の鉄山師 太田辰五郎は 鉄山業を営むかわら、牛の改良繁殖に心を砕き、体型が優美で堅牢、性質温順な千屋牛が作られるとともに、千屋では「牛比べ」が行われた。この「牛比べ」で出る褒美や、角突きの見世物が評判を呼び、その後規模の大きい「牛市」へと発展し、明治・大正・昭和と続き、名をとどろかせるほど有名となった。その後 農村の近代化が進み、牛市は閉鎖されたが、千屋牛は品種改良が進められ、肉牛のブランド牛として、その名を全国にとどろかせ、鉄穴流しと千屋牛の歴史は千屋牛誕生秘話として語り継がれている。



太田辰五郎物語 ～千屋牛誕生秘話～ 藤原嗣治著より



かつて 山砂鉄を採取した跡である千屋井原と千屋牛のモニュメント

2. 醍醐桜 真庭市別所(旧落合町大字吉念寺)を訪ねる 2008.4.13.

関西ではもう 街の桜はほぼ終わった4月13日日曜日 快晴の朝 今日は佐用まで高速を使わず、相生からまっすぐ北へ丘陵地を貫いて 放射光の研究施設がある播磨学研都市を抜けて三日月町・佐用町へつなぐ新道 テクノライン を走り、佐用から中国道に入り、落合 IC まで走る。中国山地の南側の縁を縫いながら中国道を車で走り、津山盆地を突きつきり、山間を北へ米子道を分岐し、まもなく南北に流れ下る旭川を渡ると落合 IC。途中 三日月町の佐用川沿いで姫新線の桜や北播磨天文台のある大撫山の春の写真を撮ったりと道草をしたが、2時間ちょっとで、落合 IC を出る。

落合 IC から南に出ると旭川へ流れ込む備中川に沿って西へ北房から南の高梁へつなぐ国道 313 号線にでて 備中川沿いを西へ走ると「醍醐桜」の標識が現れる。



落合 IC をでて、西へ走り、「栗原」で備中川を渡り、北へ 県道落合・勝山線の山間をはしる 2008.4.13.

「醍醐桜」のある「吉念寺」を示した地図だけが頼り。

インターネットでは山の下の集落から桜のある地点までは一本道。さほど遠くはないが、桜の季節には車で大渋滞。時には3時間以上もかかり、下の集落で車を置いて 歩いた方がよいという。

「栗原」の信号で北へ折れて、両側に家並みが続く山間を北へ抜け、集落が途切れた山間で 標識に従って街道筋から左へ狭い道に入り、谷あいを少し登り、別所の集落へ。特に車がつながっている風でもなく、「インターネットほどでもないなあ」と思っていると「小学校」の横でストップ。警備の人が「山の上への道は車で一杯 もう すぐ上から車が連なっているので、小学校に駐車してほしい」という。この集落から谷筋の山腹をそのまま登って行って、頂上のところまで上り詰めれば、頂上に「醍醐桜」。

まだ行けんことなさそうだったのですが、インターネットの書き込みもあったので、小学校に車を置く。

小学校の校庭の桜もいまが満開。期待が膨らんでゆく。車を置いて 道にでて判ったのですが、もう狭い道は車で一杯のじゅずつなぎ。すぐ小学校に入ったので、わからなかったのですが、多くの人が、集落の駐車場に車を置いて歩いてゆく。

やっぱり人出が多いのだ。早く小学校に駐車して正解だった。

醍醐桜のある山の上の集落には 小学校から 谷あいを奥へと登ってゆく、一本道。狭い山間に臨時の駐車場が設けられ、街の人が「醍醐桜」への道の誘導と交通整理に当たっている。登り道ではあるが、ゆっくり歩いて 30分ほどだと聞く。小学校の校舎に「別所の子」の名前が大きく貼り付けられていて、「はっ」と気がついた。この地名は「別所」。



「醍醐桜」のある別所 下の集落にある別所小学校

古代から技術集団が移り住んだ谷あいの集落にこの地名が多い。ここはたたら製鉄地帯。ここにもたたら技術集団が居たのかもしれない。この谷あいを奥へ入ってゆくとたたら場あっても不思議でないが、小川が小さすぎるか??と。



山間の谷筋を奥へと続く道からは視界が開けず、山の上の桜は見えず、益々期待が膨らんでゆく。

ポケットから磁石を取り出し、溝に砂鉄がたまっていないか、崖の岩に磁石をあててみたりしながら歩くが、砂鉄はないようだ。また、交通整理にあたる土地の人に聞いてみるが、どうもこの谷筋にはたたら跡はないという。

10分ほどで、山の尾根の上にある集落への登り口。

狭い自動車道はそのまま奥へ続いているが、ここから山の反対側の斜面を登ってゆく山道がついていて、「大勢坂」の案内板が着いている。

車を置いて谷の奥 上の集落へ

昔 後醍醐天皇が「醍醐桜」のこの街道筋を登っていった時 大勢の集落の人たちがこの坂の下で見送ったのでこの名があるという。 まあ 後でこじつけたのかもしれないが……



上の集落への上り口 隠岐へ流される後醍醐天皇を大勢の村人が見送ったという「大勢坂」 2008.4.13.

階段状の山道が上へ上へと続いていて、15分ほどで登りきる視界がひらけ、尾根の上に集落が見える。

そこへ登ってゆく道に多くの人の群れが続き、道のそばに淡い白の花を付けた「三桎」が栽培されている。はじめてみるが、これが和紙の原料となる「三桎」で、なるほど茎が三つに分かれ、その先端に花がついている。みんな珍しいのか 花に顔をくっつけている。



上の集落への道端には和紙の原料「三桎」が栽培され、白い花をつけていました 2008.4.13.

ちょうど逆 U 型の浅い谷の最上部。そのふちの一边を上へ上へ続く。見上げる山の尾根の上へ続く人の群れ。あのあたりに「醍醐桜」があるのですがまだよく見えない。

尾根の上部と書いていましたが、上に上がると、まだ先に緩やかになった谷筋が上につづいていて、その谷筋の縁の傾斜地を斜めに道が続き、両側の傾斜地や窪地には段々畑が続き、その谷の縁や奥に数軒家が建っているのが見える。

インターネットで読んだ「山の上の集落」。ここに「醍醐桜」があるはず。もう 少しである。

さらに少し登ると 左手に緩やか谷の縁に出て、谷の最奥部緩やかなすり鉢状の傾斜地に点々と集落の家が見え、園上の尾根の左手の林の中に 一本満開の花をつけた桜が頭を出している。其処へと人の列が続き、この森へと続く谷の中の車道には自動車がじゅずつなぎ。

まだ、全体は見えないが、やっぱり 山の上空に突き出て咲く桜だ。

「醍醐桜」へ 上の集落への道の人の群れ

また、登ってゆく道のがけ下の桜も満開で、山の傾斜地に点在する家々と緑の森に淡いピンクの花が山里の春の素晴らしい景色を作っている。



谷の斜面に広がる桜満開の上の集落・吉念寺 が見え出すと 見上げる一番上の丘に一本桜が頭を出している

2008.4.13.

ここからは 谷の向こうに見える丘の上の一本桜を見ながら崖縁の集落を抜けてとどろんと近づいてゆくと、程なく堂々とした姿で丘の上に立つ一本桜「醍醐桜」の全体が見える。

あまり近づきすぎるとこの姿は見られなくなるので、しばし、ここで桜を眺める。

「和鉄の道」の街道筋の見上げる山の上の一本桜。イメージしてきた姿にぴったし。

弧状を描く丘の頂上に実に均整の取れた姿で堂々と立つ姿は惚れ惚れするほど美しい。

700年とも1000年とも聞きましたが、支え木もなく、太い幹を空一杯に広げ、ここから見る姿は実にたくましい青年の桜だ。やっぱり 元気がもらえる。今年も一本桜の堂々とした姿が見られた満足感でいっぱい。



上の集落から 谷を挟んでむこうに 丘の上にとっしりと根を下ろし、満開の花を咲かしている一本桜「醍醐桜」

大勢坂を登り始めて約30分ほどで、「醍醐桜」のある山の頂上部に到着。

谷の中の反対側から登ってきた車道ともこの頂上部で合流。車道はそのままこの尾根を乗り越えて北の方へつづいていて、その奥にも臨時の駐車場があるのか、延々と車が並んでいる。

車道とクロスして そのままちょっと行ったところが、尾根筋に少し突き出たなだらかな丘になっていて、その頂上に「醍醐桜」があり、グルリと一周できる用になっている。この丘からは周囲の山々や、登ってきた谷筋の道 そして この山の上の集落全体も見渡せる。林の中の谷筋を登ってきたので、あまり感じなかったのですが、周囲の山々を眺めると随分高い場所である。

ちょうど この山上の集落は大阪府と奈良県の境 龍田山の頂上部から谷筋に広がる雁尾畑とよく似ている。

桜もさることながら、山の上の集落はやっぱり美しい。ここも雁尾畑と同じく製鉄集団が居たのかも知れないとのイメージが頭をもたげる。

すぐ横の広場にはすすくと「醍醐桜」の二代目がそだっていて、そちらも満開の花を付けている。

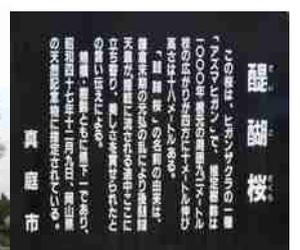
ごった返す桜の周りをあちこち歩きながら、この「醍醐桜」を楽しむ。



丘の上にどっしりと根を下ろし、満開の花を咲かしている一本桜「醍醐桜」 2008.4.13.



「醍醐桜」の丘より 上の集落・吉念寺を見下ろす 2008.4.13.



「醍醐桜」 2008.4.13.

推定樹齢は1000年、目通り7.1m、根本周囲9.2m、
枝張り東西南北20m、樹高18mの巨木

桜を眺めながら 昼の握り飯をほおぼって、何度も桜の木を振り返りつつ山を降り、午後はまだ一つの目的地 新見市千屋の里へ向いました。

奥備中・美作と伯耆の国境近く 和鉄の道の十字路の山上で 700 年 「和鉄の道」を見下ろしてきた一本桜「醍醐桜」そのたぐましい桜に心惹かれました。これからも咲き続けて欲しいと。

また、春の山里の素晴らしい風景が展開するこの山上の集落への道も 「醍醐桜」をながめる期待をふくらます道筋。このままで 車締め出しの姿で居て欲しいなあ…と。

また 一本 僕の頭に美しい日本の桜の木が加わりました。

3. 奥備中 高梁川本流の最上部 新見市千屋に たたらの痕跡を訪ねる 2008.4.13. 山砂鉄採取の跡が育てた肉牛「千屋牛」



山砂鉄採取 山の切崩し



「醍醐桜」を見て、山を降りてくる頃から曇り空になり、午後は霧雨であるが、次の目的地は新見市千屋周辺へ向う。

この3月新見市の大成山たたらを見に行った時には時間とれず行けなかった高梁川本流の最奥部で 備中高梁藩のたたら製鉄の中心的な場所である。

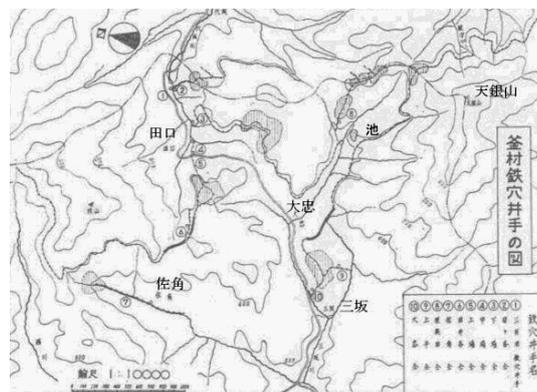
インターネットで調べると高梁川最上部の旧窯村や千屋地区周辺は山砂鉄の宝庫であつたらしく、たたら製鉄が行われるとともに、砂鉄採取により山きり崩され、山の頂からそっくりすり鉢状になった草原地形が残り、点々と鉄穴流しの痕跡が残り、山に入ると鉄滓が拾えるという。

(http://temari.net/tatara/houmon/houmon_3k.htm)

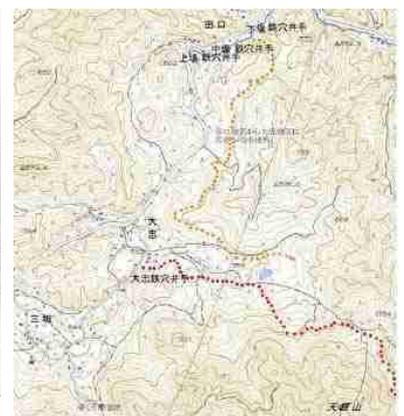


そして、この砂鉄採取跡の草原で たたら場の使役に使っていた牛を飼育・改良して 現在の「千屋牛」を作りあげたという。この奥備中のタタラ衆が育てた牛が その後の改良を経て「千屋牛」そして「神戸ビーフ」のルーツとなったという。すぐ イメージに浮かんだのは 北播磨の砥峰高原の残丘が残る素晴らしい草原風景。

国土地理院の地図で地形をみると沿う現状の地形。このあたりも砥峰高



釜村鉄穴井手の図 (「新見市史」(P271))より
(http://temari.net/tatara/houmon/houmon_3k.htm)



備中 新見神郷 砂鉄採取跡 旧窯村地区 (点々と鉄穴 砂鉄採取地点が続く)
(http://temari.net/tatara/houmon/houmon_3k.htm)より

原と同じ、人工の草原か……

私たち神戸に居ると「神戸牛」というとすぐに「但馬牛」ということになるのですが、そのルーツに「千屋牛」があるのか広くよく知られているごとく、「但馬牛」の血統が入れられて「千屋牛」が誕生したのか よくわかりませんが、「但馬牛」の故郷「但馬」もまた「但馬牛」が飼育されている北播磨の佐用・宍粟もこの奥備中「千屋」もいずれもたたら製鉄地帯 砂鉄採取がさかんであつたろう。タタラ衆と和牛との結びつき 考えたことありませんでした。

この目ですり鉢状の砂鉄採取跡の草原に立ちたいと……。

また、中国勝山から山を越えて伯耆・出雲へ行く出雲街道は現在国道 181 号線となって新庄村の四十曲峠を越えています、こちらは勝山藩の領地に属している。高梁川沿いに領地が広がる備中松山藩のたたら製鉄地帯からも直接 伯耆・出雲とつながる道が江戸時代にはあったはずと、調べると新見 神郷・千屋地区からも直接山越えて出雲・伯耆へつながる道が正保備中国絵図に記載された「和鉄の道」がありました。

西から 高梁川本流沿いに千屋から 現在の国道 180 号線が越えてゆく明智峠 そして 現在は痕跡となっているが、千屋井原「蓬」から北へ蓬峠を越えるルートである。



正保備中国絵図に記載された明智峠・蓬峠・番木峠

また、蓬の東 市倉峠を越えると大井野から現在の太佐・日野線に出て北へ番木峠を越えるルートも記載がある。

新見市千屋地区には 醍醐桜のところから、北へ勝山に出て行くのが近いのですが、高梁川の本流地域を遡りたくて、もと来た落合に戻り、備中川沿いを北房を経て 新見市内に入り、国道 180 号線を霧雨の中新見から高梁川の本流を遡る。地図に印をいれておいた千屋の中心部 かつてたたら製鉄が行われたという千屋井原地区の千屋スキー場周辺と「蓬」まで行って、それから少し戻って、 たたら採取跡のすり鉢状草原地形が見られる旧窯村・神郷へ抜ける道の三坂地区へ入る予定である。



新見から国道180号線にはいると山間 まもなく千屋ダムを過ぎると 千屋の里

千屋ダムを抜けると狭い谷あいには家並みがでてきて、千屋の集落に入る。

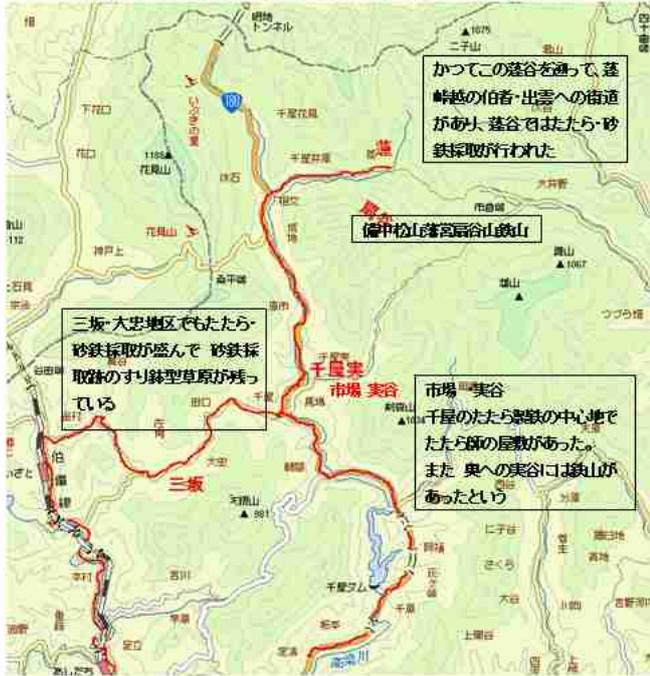
左へもう一つ西側の伯備線の通る西川沿いの新郷にでる道を分岐すると谷間は広がって、千屋の中心地域「千屋実 市場地区」。180号線の道脇に 牛のモニュメントが前にあり、「千屋牛の里・千屋牛資料館・和牛レストラン」の名前が見える。

たたら製鉄の情報も欲しいし、折角来たのだからと 千屋牛の肉を食べてから千屋地区の集落に入ることにする。

たたら製鉄については「聞いたことがあるが、具体的にはよくわからない」という。

資料館も千屋牛の血統など改良の歴史が書かれているだけであつた。わずかに 千屋牛の歴史として、江戸期の鉄山師太田辰五郎が 牛の品種改良にも力を注ぎ、黒毛和牛「千屋牛」の繁殖に成功し 天保5年 1834年に「千屋牛市」を開設して繁栄を築いたことがPRパンフに書かれていた。

高梁川最上流部 奥備中のたたら製鉄地帯
 近世 備中松山藩宮鉄山があった新見市千屋地区
 このたたらのははブランド和牛「千屋牛」の里となった



千屋牛資料館で



千屋牛のレストラン

何処もそうであるが、ここでも 住んでいる人たちからは かつてのたたら歴史が消えつつある。 食べた「千屋牛」のステーキは安く 柔らかくて おいしかった。

3.1. 近世たたら製鉄と砂鉄採取で栄えた「千屋井原」の里



近世たたら製鉄と砂鉄採取で栄えた「千屋井原」の集落が広がる広い谷筋 2008.4.13.

雨が降ったりやんだり 霧雨の中、国道をもうすこし北に走ると、右手に開墾された田畑が広がる広い谷があり、真ん中を川が流れている。これが千屋井原の集落が広がる谷で、川を渡って北側を右に進んで奥へ。

道と平行して広がる谷は小さな川が真ん中を流れ、その向こうになだらかな段々畑が緩やかな丘陵地にひろがり、さらにその向こうにこの谷を形成している山が平行に立ち並んでいる。



近世の扇谷山鉄山があったあたり 千屋井原

この山裾に広がる緩やかな傾斜がおそらく砂鉄採取した跡かもしれないが、開墾され、段々畑になっていて、よくわからない。

きろりよきよろしている間に、井原の集落をぬけ、窪谷への道を分岐する小さな祠が祭られている道の分岐点に来る。

千屋スキー場のあたりは見過ごしたようだ。幾つか広い傾斜地のある枝谷がみえたが、それだろう。

このまま まっすぐ、奥にゆくと市倉峠を越えて大佐へぬけてゆく道であるが、ここから狭くなり、草が生い茂り、ほとんど使われていないようだ。



井原の谷の奥「窪」 窪峠と市倉峠の分岐 かつては 砂鉄採取で栄えたところと聞く

また、北への道は蓬谷に入る道で たたら製鉄華やかな時代にはこの谷の奥蓬峠を越えて 伯耆・出雲へ道がつながっていたというが、今は廃道 奥の谷にも人気がない。

この周辺でも砂鉄採取がされ、たたら跡があったと地図に付けたマークを参考に周囲を見渡すが、よくわからず。

もう一度 戻って 扇谷山鉄山があった千屋スキー場を探す。

地図からすると谷の南側に見える山のふもとの傾斜地あたりか……

でも このあたり何処も「鉄」が含まれい居るはずと車をとめて、道端の石に磁石を近づけるとぴったりと磁石が岩に吸い付く。この周辺山を崩せば いたるところで砂鉄が取れたのだろう。



近世の扇谷山鉄山があったあたり
千屋井原 千屋スキー場が林の向こうにあった



千屋 蓬と井原の集落の間で 道端の岩に磁石を近づけるとぴったり吸い付いた 2008.4.13.

どうもこのあたり 谷の向こう側が千屋スキー場か… でも標識に気がつかなかったが、どこかで谷の向こう側に渡ろう。

少し戻って、井原の集落のはずれにさしかかったところに車がかりうじて渡れる細い道が谷へ分岐し、その傍らに立つ古ぼけた棒に「千屋スキー場」と書いてある。これだと恐る恐る谷を降りて反対側にわたって細い道が続く林の中に回り込むとロープが入口に張られたスロープが見える。もう つぶれて放置されているようだ。



千屋スキー場への道 やっと通れる細い道 その奥に つぶれたスキー場のスロープがあった



千屋スキー場 この左手側の周辺に 扇谷山鉄山があったというがよくわからなかった 2008.4.13.



扇谷山鉄山があったのはこの奥か??

スロープの周辺に幾つものなだらかな丘が見える



スロープの上から入口のほうを見る

スキー場のスロープを少し登るとスロープの東側にそって雑木林に包まれた谷。これが扇谷で、この一角にかつて扇谷山鉄山があったのだろう。まったく人気のない廃墟化したスキー場の中で ロープをくぐって入ったので、途中まで、スロープを登ってみたが、奥にはよう行かなかった。

しかし、見る限り、山のふもとまで、なだらかな傾斜で 幾つものコブが続いているようだ。ここでも 砂鉄が採取されたのかもしれない。砂鉄がないか 鉄滓が落ちていないかと眺めながら スロープを下るが、見つけれなかった。

また、入口のところにある岩に磁石を近づけるとやっぱり、磁石が吸い寄せられた。



雨模様で 周りにひとがいないので、たたら跡を見つけることはできませんでしたが、近世には この谷でもたたら製鉄が行われたのだろう。そして、この谷あいのあちこちの家で、牛が飼われたとかつてに推測している。

3.2. 砂鉄採取のすり鉢状の地形が残るといふ 旧釜村 三坂へ

雨が段々ひどくなってきたが、砂鉄採取跡の地形が残っているという「神郷 旧釜村 三坂」地区へ向う。

千屋井原の谷筋から再度国道180号線に戻って、元来た道を千屋実の千屋牛の里のところを少し通り越して、「神郷」の道路標識で右手に入る。こちら側にも あまり深くない 幅の広い山間の傾斜地を登って、峠を越えてさらに下ると両側の山に挟まれて広い傾斜地が広がり、段々畑になっている。



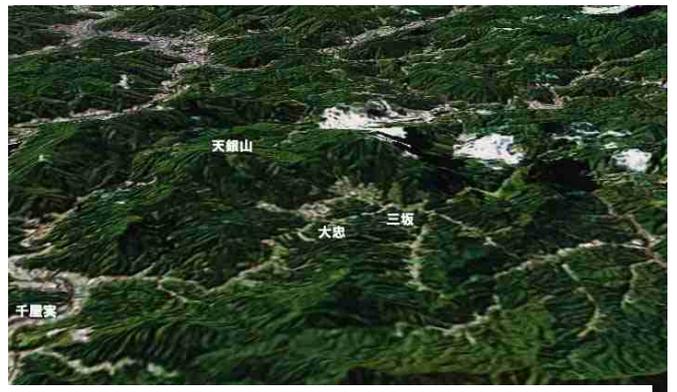
三坂地区と大忠地区の境あたりの傾斜地にはいって、地図と周囲の景色とを見比べる。
 谷というよりも だだっ広い傾斜地が緩やかな U 字状に両側に段々畑となって広がり、山裾へとつながっている。



千屋から神郷への道 大忠・三坂周辺で 緩やかな傾斜地が幾つもの小さい丘に別れ段々畑になっている



三坂の集落にはいって だだっ広い緩やかなスロープが畑になっていて その中に幾つもの小さな森が点在 2008.4.13.
 開墾され、段々畑になっていて よくわからないが、このスロープが砂鉄採取の跡地かもしれない



砂鉄採取跡の鉄穴が点々と続く 旧釜村地区 地点が続く

北側からみた 旧釜村 大忠・三坂周辺鳥瞰写真 google

(絵図・地図 上が南に変換加工しました)

砂鉄採取の跡地 そして 千屋牛の牧場のイメージから 北播磨の砥峰高原のようなすり鉢地形がそのまま草原となって残っているとイメージしてきましたが、この千屋では 数多くの人たちが生活しているため、ほとんど集落周辺の山や谷が切り崩されて段々畑として開墾整備されているのだろう。草原の感じはしないが、谷の形がうすれ、谷全体がくぼ地のようだ。鉄穴流しのスロープがみえる砂鉄採取の跡地のすり鉢地形は残念ながらよくわからなかった。

「鉄」を持ち込んだ「開拓神」の話は各地に数多くありますが、たたら衆のたたら製鉄となると農民との争いの話ばかりしか知りませんでした、この地形変化を見るとこれは開拓そのもの。



古代にはこれほど 大規模な山の切り崩しが行われたとは思いませんが、案外「開拓神」として語り継がれる中に こんなタタラ衆が実施したたたら製鉄そのものが 地方開拓を呼び込んだのかもしれない。

いま私の住んでいる西神戸は人工島造成の為の土砂採取の跡地。はじめは山から海岸へ土砂を運ぶ厄介者 また 山はあるし・・・と。それが、いつの日か発想転換され、大規模住宅地開発と跡地利用が結びついて、成功物語へ。

この千屋の地形変化と千屋牛 流れ下る大河 高梁川 そして この山中にはられた街道筋を思い浮かべながらそんなことをふと考えました。

そして、この「和鉄の道」の傍らの山の上で じっとこの時の移り変わりを1000年近くもじっと眺めてきた「醍醐桜」まっすぐ空に向って 堂々と枝を張る姿には したれ桜にはないエネルギー。ましてや 老木というのにまだ 青年の若々しさ。また 一つ 素晴らしい桜が 奥備中のたたらの話とともに 私のアルバムに付け加わりました。



奥備中 中国山のたたら製鉄地帯の真っ只中 和鉄の道の出来事を約1千年 見下ろしてきた「醍醐桜」



「醍醐桜」のある真庭市別所 上の集落・吉念寺



近世の砂鉄採取の痕跡を残す神郷三坂地区